

学年通信 4月 渡り鳥

豊橋市立羽田中学校 3年生
令和3年4月30日

本当の取り組みとは？

25年前、先生は教員として二川中学校に勤めることになり、部活動は男子バレーボール部を担当することになりました。バレーボールの経験はありませんでしたが、ルールや戦術を必死になって勉強したことを今でも覚えています。生徒たちの「努力」の結果、県大会に出場することができました。

裏面に印刷されているプリントは、1年目の先生が先輩の先生からもらったものです。

今回みなさんに伝えたい内容は、裏面右側の「★負けて本当に悔しいか。」に記載されていることについてです。夏の大会は多くのチームや個人が敗戦し、中学校での部活動を終えることとなります。その終わり方をどのようにイメージしているでしょう。

突然ですが、先生が好きな漫画を紹介します。「はじめの一步（いっぽ）」という漫画です。



ボクシングを題材とした森川ジョージさんによる日本の漫画作品で、1989年から「週刊少年マガジン」（講談社）で連載中です。

母子家庭で育ち、釣り船屋を親子で支えている主人公「幕之内一步」がプロボクサー「鷹村守」との出会いをきっかけに鴨川ボクシングジムに入門します。「強いとは何か？」という問いの答えを求め、プロボクサーとして、また人間としても成長していく過程が仲間との交流やライバル達との戦いを通じて描かれています。2021年3月現在、130巻まで発行されていて、累計発行部数は9600万部（2019年8月時点）を突破している漫画作品です。

**努力した者が全て報われるとは限らん
しかし！ 成功した者は皆すべからく努力しておく!!**

左に描かれているのは、単行本の42巻「鷹村守」が世界タイトルマッチに挑む前に鴨川会長が語った言葉です。

「努力」して結果につながればよいのですが、そううまくいかないこともたくさんありますね。部活動に限らず、勉強もそうでしょう。しかし、この言葉にあるように「努力」しなければ成功することもあり得ないのかもしれない。

今年度の総合体育大会は、7月3日（土）から開催される予定です。〔一部の部活動は除きます〕夏の大会まで2か月しかありません。練習可能な日数は、30日を切りました。ぜひ、1日1日を大切に、精いっぱい「努力」して総合体育大会を迎え、全力を出し切ってほしいと思います。

「今までがんばってきてよかった。」と思えるように、残された日々の練習に一生懸命取り組んでくれることを期待します。総合体育大会でのよい結果の報告を楽しみに待っています。



今日の試合で一番印象に残ったチームは？

- ・〇〇中学は、靴がしつかりそろそろえてあった。
- ・〇〇中学は、声がよく出ていた。
- ・〇〇中学は、トイレの使い方がよかった。
- ・〇〇中学は、負けっぷりがよかった。

優勝チームではなく、「優秀」チームになりたいたいものです。

★負けて本当に悔しいか。

ある団体スポーツの試合を見て驚いたことがあります。試合直後は負けて泣いているのですが、1時間もすると笑いながら、とても嬉はらずみな行動をとっています。本当の取り組みをしてきたならば、悔しくて食事などを通らないはずで、まして中学3年の最後の大会であったならば、負けたその日ぐらい全身の力が抜け、複雑な心境になるはずで、ところが、試合後間もないのに「やっと部活動が終わった」と言わんばかりの開放的でマイナスな笑顔を見ると、積み重ねがない表面だけの活動だったんだな、と悲しくなります。

「負けて本当に悔しい試合」をすることが大切だと思います。そして、しばらくたってから「よくがんばったな」と自分自身を褒めてあげられたら最高でしょう。

だるうとうそぶく若者もいます。しかし、そういう者に限って、皮肉にも実は内容貧困でだらしない場合が多いように思います。真剣にものを学ぼうとする、謙虚な意欲をもつ者にとっては、自らの生活に対する心構えがしつかりしていないければならないことは、三原監督の教えがよく物語っています。

服装が我々に与える影響は大きいものです。かりにアロハシャツにラップスボン、しかもカ

ムをクチャクチャさせず、緊張の運転席に座る運転士がいたら、どんなに腕が確かでも私は不安の余りその意車を降りるでしょう。制服・制帽を正しく着用しているからこそ、その人の操縦するジェット機で安心して太平洋を渡るという気にもなるのです。服装が正しくてもインテンキキな人間はいますが、確かな人間の率の方がはるかに高いのです。

試合での心構え その6

★慣れられるチームになろう。

強いチームは当然、一般的に「すごいな」という印象を持たれます。しかし「あのようになりたいな」と心戚から憧れられるチームというのは、勝負に強いだけでなく、礼儀やマナー等がしつかりしているすばらしいチームです。剣道の例を紹介します。

「身の周り」 三原脩監督

日本のプロ野球史上に大きな足跡を残した三原脩監督が、当時いつも最下位だった近鉄球団に迎えられました。近鉄の選手たちは、監督がどんな話や練習をするのかと期待に胸をはずませていました。

ところが、監督が選手たちに向かって命じた第一声は、意外にも「ロッカーを清掃・整頓せよ」だったのでした。

*

私はこの話を聞いて非凡な監督のすばらしさを感じました。果内はもちろん、果外の名門校を数多く視察しましたが、運動部が盛んで、しかも強いところほど部員のマナーがよく、清掃の行き届いたすがすがしい環境で、火花の散るような練習に励んでいたことを思い出します。

考えてみれば、自分たちが使う道具の後始末もせず、運動着を乱雑に脱ぎ捨て、部室は泥だらけの荒れ放題というチームがよい成果をあげるはずがないのです。自分たちの練習場を1つの道場として臨むかどうか、その心がけの差がそこに表れているのです。服装がどうであれ、頭髪がどうであれ、中身の人格や能力があれば外見なんかどうでもよい